

高知

偉人を数多く輩出した街

豊かな自然に囲まれ、太平洋に面してのびやかに広がる高知県。人々の開放的で、強靱な性質はこの風土により育まれているのだろう。高知が生んだ偉大な植物学者・牧野富太郎もまさにそんな人物だった。そして彼の業績をたたえるために作られた高知県立牧野植物園は、今も、その志を継ぐ人々によってしっかりと守られていた。

取材・文 木内 昇 写真 野瀬勝一

高知市街の東、国分川を越えたところに五台山という山がある。

四国八十八カ所の札所・竹林寺が建ち、市内を一望できるこの山は、江戸の昔から行楽の地として土佐の人々に親しまれてきた。「植物園を作るなら、五台山がええ」。そう

言ったのは、植物分類学者・牧野富太郎である。五〇年前、彼の業績をたたえる施設として植物園開設の話が持ち上がったときのことだ。

牧野富太郎は一八六二年、まさに土佐の傑物、坂本龍馬や中岡慎太郎が国事に奔走しはじめたそのとき、高知県高岡郡佐川町に生を受けた。幼くして植物の虜となった彼は独学で植物学を学び、二二歳で上京すると東京帝国大学の「植物学教室」に出入りを許される。

五〇歳から七七歳まで同大学で講師を勤め、退官した後もなお精力的に研究を続けた。九四歳で没するまで、見つけた新種、新品種は、一五〇〇にのぼる。まさに日本の植物学の礎を作った人である。

土佐のいごっそうらしく、信念と情熱で自分の仕事を貫いた牧野博士。その支柱となったのが、博士が一九歳の頃に表した「しやべん緒鞭一撻」なる全一五項の勉強心得である。その項に「書籍の博覧を要す」とある通り、彼が生涯で集めた書籍は実に約四万五〇〇〇点。聖書、植物文化史、万葉集、一七〇〇年代に編まれた『蘭文リッネの博物誌』など、ジャンルは多岐にわたる。中国・明の時代の『本草綱目』は唐本から和刻本まで二三セットあるほか、同じ本でも版違いで収

集しているから筋金入りだ。これら貴重な書物は現在、洋書、和書、漢籍などに分類され、園内の牧野文庫に保管されている。

「江戸時代の蘭学者・宇田川榕菴ようあん著の『植学啓原』も縮小してそっくりに書き写し、携帯用に作り替えたりにしているんですよ」

そう言うのは牧野文庫司書の村上有美さん。博士は、「当に図面を引くを学ぶべし」「精密を要す」の項に違わず、精緻な植物スケッチも数多く残した。牧野富太郎記念館展示館には博士の年譜や再現した書斎とともに、こうした植物画も多く展示されている。展示デザインナーの里見和彦さんは言う。

「採集した植物を季節ごとにスケッチし、最終的に一枚にレイアウトして植物の生長の過程がわかるよう植物図を作成しました。何度も描くことによって植物の形や特徴を身体で覚えていったようです」

展示館には借金返済のための直筆の計画表も。学歴の問題や内部の軋轢あつれきにより、大学での博士の扱いは必ずしもよいものではなく、一生薄給の講師に終わったため金銭的には苦労したという。

「日の目を見たのが朝日文化賞を受けた七五歳と遅く、その後も生

牧野富太郎記念館本館の屋根は鉄骨キールと柱、集成材の垂木で作られている。同形の木材を使わず、屋根の形状と傾斜を細やかに変化させているのは風荷重をうまく逃すため。台風の多い土地柄を考慮して設計された（左）。展示館中庭にはサクユリなど博士ゆかりの植物が植えられている（右）。



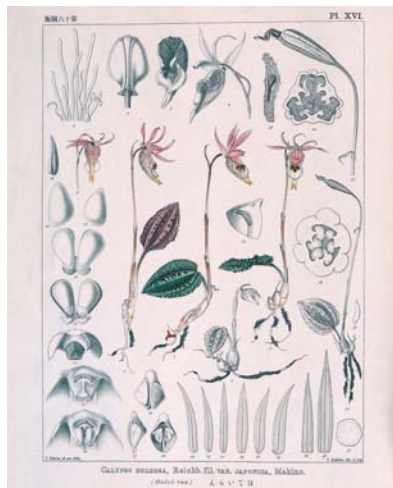


牧野文庫には膨大な蔵書の他、博士の描いた植物画も保存されている(左)。昭和15年、ギンリョウソウを手に微笑む博士。博士のサービス精神のなせるわざか、全国のファンにより肖像写真も多数(高知県立牧野植物園所蔵)(右)。

活は楽とはいえなかったようです。にもかかわらず書籍には金を惜しまず、植物採集に行くのに横浜のテラーで背広をあつらえるなどしていました。当然借金もかさみました。同郷の岩崎財閥をはじめ、折々に強力な支援者が現れ、窮地を脱していたようです。中には牧野さんは堂々と借りに来るので貸しやすい、という逸話もあるほどです」

「吝財者(ケチ)は植物学者たるを得ず」。これも心得のうち。当の博士は「一生を貧乏で暮らす富太郎、福の神様横向いてゆく」とどこ吹く風で、植物の研究ができれば十分に幸せだった。

「私は植物の愛人としてこの世に生まれ来たように感じます。あるいは草木の精かもしれないと自分で自分を疑います。ハハハハ」



牧野富太郎記念館展示館にて公開されている大泉学園の家の書斎「ようじょう書屋」。博士90歳の頃の蠟人形が特注の机に向かって作業中(左)。博士編纂『大日本植物志』第1巻第4集に掲載されたホテイランの植物画。葉や花の季節ごとの変化を1枚にまとめている(高知県立牧野植物園所蔵)(右)。

有用植物を生かす 植物と経済を結ぶ道

さて、前出の牧野文庫のある牧野富太郎記念館本館や展示館をはじめ、映像ホールやアトリエ実習室と、充実した園内施設は、一九九九年のリニューアル時に新たに作られたものだ。

「以前は現在の南園にあたる約二・五ヘクタールの園地のみでした。それを県が、約一八ヘクタールに広げ、記念館を建築する予算措置を講じました。文化度を向上させるため、橋本大二郎知事が美術館、高知工科大学の創設に続き、この植物園にも力を注いで下さった。それがリニュアル成功の非常に大きな要因だと思います」

そう語るのは、牧野博士の愛弟子であり、過去四〇年以上にわたリニューヨーク植物園の管理研究官を勤めた小山鐵夫理学博士。リニュアル時に園長として赴任した小山氏は、まず植物園の方向性を検討したという。

「植物園は大きくわけてフラワーパーク型と研究型との二種類あります。フラワーパーク型の場合、年間花を絶やさないようにするために莫大な経費がかかります。でも研究型植物園ならばその二〇分

の程度で運営できる。加えて、国の研究費や企業の委託研究などの外部資金を受けることもできます。高知県は人口が八〇万人と少なく、入園料は期待できない。ですから、財政基盤を整えるには研究型のほうがふさわしいと判断しました」

それまで日本にはなかった文化活動、教育活動、研究活動を兼ね備えた植物園を形にするため、園長は次々と発想を生んでいく。まずは大学との連携講座。植物園の研究員三名が国立高知大学の理学部の教授や准教授などを兼ねるシステムを構築した。大学側はこれにより人件費、施設費を削減でき、逆に植物園は文部科学省から研究費獲得に繋がる研究機関指定を受けられる。植物園の標本室長である研究員・田中伸幸さんも、高知大学客員准教授を兼ねている。

「県内外から採集した現在約二〇万点の植物標本は、学術的研究材料として保存しています。また各大学の専門家を募り、文部科学省の研究費やJICAの助成金等によってミャンマーなど海外にも調査研究に行っています」

植物園がミャンマー林業省との共同研究で行っている「ミャンマ

理学博士・小山鐵夫園長。ニューヨークの他、デンマークや台湾でも教鞭を執つてこられた。



ハーバリウム内のキャビネットには同じ植物を採集時期順に並べている(上左)。室温、湿度とも一年を通して一定に保たれている(上右)。標本は冷凍して虫を殺し、乾燥させたさく葉標本(下)。



「の植物多様性および有用植物探索研究」も、大学と連携しつつ進められている。

また資源植物研究センターを置き、薬用植物の研究もスタートした。所長で薬学博士の岡田稔氏はこう語る。

「我々は企業の必要とする植物を、研究・調査の過程で採集することができます。その代わり企業には動物実験で協力いただく。共同で研究開発するルールを敷いています。高知は植物がよく育つ土地です。これまで見つからないオリジナルの漢方薬などを開発しよう、という気構えで研究を続けています」
これらはすべて、将来的には県費のみに頼らず植物園が自立する方向を講じるための手だてだ。



「植物園の運営には県民税を使っています。それを趣味的にだけ使ってしまうというのでは倫理的にもとりますし、いつまでも経済的に県に負担を掛けるわけにはいきません。ここから新たな産業を生み出し、経済的に自立して、なおかつ研究の成果をもって県の産業を盛り上げるところまで発展させなければ。いずれ県民に貢献したいと考えています」

そう言う小山園長は、ニューヨーク植物園在任時、二度も市の財政破綻に遭遇している。当然、市から下りるはずの植物園の運営費はストップされる。このとき、植物の力で経営的に自立する道を探り、立ち直らせた際、新たに生み出した学問が「資源植物学」である。

「つまり、食料品、衣料品や医療の原料となる有用植物を活用し、経済に結びつける方法を学ぶものです。ただ、例えばベニバナでハシカチを染めて、『きれい』だけでは経済効果は生まれません。紅花油として活用し、消費されなければ。産業資源植物は、収益性と補給の持続性があることが肝要なのです」

バイオテクノロジーが注目される現在、その原料となる資源植物

本館ミュージアムショップに隣接したレストランでは、高知の食材を生かしたメニューが味わえる。



の発見と開発は、世界的に大きな命題となっている。園長は自ら見出した資源植物学の研究を続けながら、そのノウハウを牧野植物園の運営にも生かしているのだ。

イベントや特別展など 観光にも力を入れる

研究型でありながら、観光もおろそかにしないのがこの植物園の美点だ。

園地は北園と南園にわけられ、牧野博士ゆかりの植物、約三〇〇〇種が四季を彩る。正門から記念館本館に続くエントランス部分に作られた「土佐の植物生態園」はとりわけ美しく、自然の景観と見紛うほど。この園地を作り上げた栽培技術課長の黒岩宣仁さんは保全生態学を専門とし、幾多の山に入り、植物の生態を研究・観察してきた。

「樹木と、その下に生えている低



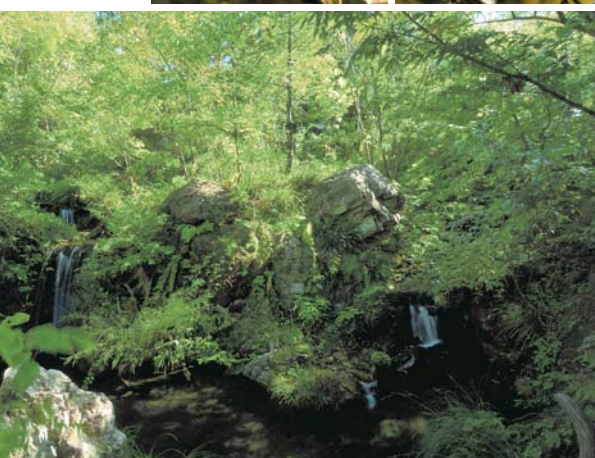
展示館には年代別の博士の歩みや、借金返済の計画表なども展示されている(右)。展示デザイナー・里見和彦さん(左)。

木や草木には必ず関連性があります。この樹の下にはこの草がある、という生態の法則を再現しました。山と谷を交互に造成し、斜面に生える木、水辺に生える植物とわけて植えていったんです」
それだけに、手入れも一苦勞。雑草として抜いていいのか、それともその場所に生えていい草なのか、生態系を把握していなければ判断できない。

「植物生態園での経験は実際の環境保全や自然林の復元事業などに大いに役立ちます。ここで実験し



正門から記念館本館まで続く土佐の植物生態園。ここに植えられた植物は取り付けられたタグにより採集地と時期が照会できる。この植物も立派な研究素材なのだ。



た結果を、自然の再生に生かすことができれば」

また、現在南園では、二〇〇八年の植物園開園50周年記念事業の一環として、日本や中国の伝統園芸植物を中心とした植栽区とするため改良・整備が進められている。これは二〇〇八年に開催される『花・人・土佐であい博』の連携イベントのひとつで、伝統園芸植物と文化について展示する『五台山花絵巻』が行われる予定。

「かつてこの植物園の土地は竹林寺の境内でした。今も南園からお寺の五重塔が望めます。その景観と合う形で、世界トップクラスだった江戸時代の園芸植物を植える予定です」

と、50周年記念事業事務局長の前田英博さん。他にも、園地を利

栽培技術課長・黒岩宣仁さん。休みの日は土佐の山々を歩き植生を観察すること。



用したイベントを企画するなど、たゆまず工夫をしてきた。リニューアル後、入園者は増え続け、県外からも注目されるまでに成長した。

植物を愛するスタッフが 牧野博士の遺志を継ぐ

この八年はともかく全力疾走だった、と小山園長は振り返る。

「牧野先生という個人の業績をたたえた珍しい形の植物園ですから、その遺志を継いで長く存続させなければいけません」

小山園長は八歳の時に憧れの牧野博士に手紙を出したことが縁で弟子となった。

「私の場合、牧野先生のように植物が愛おしいというロマンティックな面ではなく、植物の構造がどうなっているんだろうか、というサイエンス的な興味からこの道に入りました」

その後、東京大学に進み植物学

を専攻した園長だったが、あるとき銀行員の父親にこう言われたという。「おまえのしている学問はおもしろいだろうけれど、あまり人の役に立たないね。確かにこのままではそうかもしれない、と園長は思った。資源植物学、つまり植物を経済に結びつける道を考えはじめたのは、そのときからだった。

「でも牧野先生には言えませんでした。怒られそうですからね(笑)」里見さんは、東京の展示会社副社長として園のリニューアル時に常設展製作にかかわり、それがきっかけで転職を決めた。

「展示が完成して終わりではなく、この植物園をずっと見守り育てていきたいとはじめて思ったんです。東京には二五年いたものの、いつも故郷の高知が心にありましたし、今思うと、牧野さんに引き寄せられたような気がします」

黒岩さんは「親父の具合が悪いとだまされて、はからずも」高知にUターンし、園に勤めるようになる。が、それによってかつて専門としていた造園に、研究を続けていた保全生態学を融合して園地を作り上げるといふ、新たな試みに挑むことができた。

「休みの日でも園の植物が気になって。落ち着かないので、つい出勤しちゃうんです。ちなみに親父は未だにピンピンしていますよ」

植物をこよなく愛した牧野博士の「血」を受け継ぐ人々は、その精神を自分のものとして昇華した。ただ過去に模倣するのではなく、やみくもに過去を否定するのではなく、それぞれに独自の形を編み出し、自分なりのアプローチで植物園をより立てている。

「何時までも生きて仕事にいそしまん また生まれ来ぬこの世なりせば」

苦難をものともせず進む土佐の男らしく、植物一途に生きた牧野博士。仕事は常に順調とは限らない。好きなことだけやるわけにもいかない。けれど、ひとつひとつの仕事をも自分らしくやり遂げることで、どれほど美しい花が咲くのか、ここに働く人々の姿が証している。牧野博士が今なお愛されるのは、ここに働く人々の個性が寄り添っているからなのだ。

高知に住む人々の思い出に息づく五台山。この地を彩る牧野植物園はスタッフの手を経て、いっそう豊かな思い出を、ここを訪れる人々に植え付けてゆくのだろう。